

音羽山清水寺の本尊十一面千手千眼觀世音菩薩、脇士は毘沙門天、地藏菩薩なり。抑当寺の来由を尋るに、大和国

小島寺の沙門延鎮、宝亀九年の夏、靈夢を感ずる事ありて、木津川の辺りに行て見れば、一つの流に金色の光あり、源

を尋て直に登るに一流の瀧なり、傍をみれば茅ふきたる庵に白衣を着せる老翁あり。延鎮此庵に入て、御身はいかなる

人ぞ。翁の曰、我名は行叡、此地に住事は既に二百歳に及べり、常に千手真言を誦ふ、我貴僧を待こと久し、東に行ん

とおもふ志あれば、御身しばらくこゝに住給へ、我此靈木を以て大悲の像を作り、精舎を建願あり、若遅くかへりな

ば、御身我にかはりて此ねがひを成就し給へといへり。延鎮もとより夢の告あれば、辞する事なく翁の心にまかせける。

大いに悦て翁は東に向ふて庵を出たり。夫より延鎮此所に住めり。或時山科の東の嶺にて、かの翁の履を拾へり。延鎮

おもへらく、さてはかの翁は大悲の応現ましくけるよと、ありがたくいよく大悲の尊像を安置せんと、ねがひ有な

がらちからたらずして年月を送りしに。延暦十七年に將軍坂上田村丸、産婦のために鹿を獵して音羽山にわけ入、かの

草庵に至れり。延鎮田村丸に逢て翁のしめせし事を告る、田村丸渴仰の思ひをなし、屢延鎮の相好を見るに、神仙の如

し。是即大士の化現ならんと信心いやまし、家に帰て妻女にかたれり。妻の曰、わが病を治せんとて多くの殺生をなす、

此罪いたつてふかゝるべし、其教にまかせて大悲の尊像を安置し奉らば、いかばかりの利益なるべしと。夫婦心をあは

せて觀音寺を建て、延鎮に寄附せん事を約す、又行叡より授りし靈木を以て觀音の像を作らん事を願ふ。延鎮其夜夢中

に、十一人の僧来て大悲の像を作る、長八尺十一面四十臂の千手觀音なり、造り終つて十一人の工僧行方を知らず。夢

覺て見るに赫奕たる尊容現じ給ひて目前にあり。当寺本尊是なり。夫より仏殿を建んと思ふに、此地險岨にして尺地もなかりければ、いかゞと心憂かりしに、其夜多くの鹿きたりてやすらかに平地になせしかば、仏殿を造りて大悲の像を安置し奉れり。「鹿間塚は此由縁なり」

脇土地蔵毘沙門天は延鎮法師えんちんほつしの作なり。田村丸延曆二十年に詔をうけて、東夷征伐の時、此本尊に祈りしかば、觀世音地蔵毘沙門天彼戰場に現じ給ひて、ことごとく退治し給ふ。同廿四年に田村丸太政官府の宣旨を蒙りて堂塔を建立し、勅願所となし、又大同二年紫宸殿しいでんを給ひて伽藍となし、觀音寺を改て清水寺せいすゐじと号せり。

奥の院の本尊は千手觀音の立像なり。此地は延鎮法師草庵えんちんほつしの跡なりとぞ。

阿弥陀堂は瀧山寺りうざんじと号す、本尊は阿弥陀仏の坐像を安置す。文治四年五月十五日、法然上人瀧山寺にて不断常行念仏を開闢し給ふ、今に退転なし。朝倉堂は越前あちぜんの国司朝倉彈正貞景是を建立す、田村堂には田村將軍たむらしやうぐん、鈴鹿權現すゝかごんげん、行叡ぎやうゑい、延鎮等ちんの像を安置す。

泉ふくろうのみづ水は中門の西にあり、靈泉にして地中より涌出る事寒暑に絶ず。

地主權現のやしろは大己貴命おほなむちのみことなり、例祭は四月九日、清水坂八坂郷の祭なり。当山はむかしより桜の名所にして、春も弥生の頃は花咲、一入にかほりて、さながら雲と見れば雪と散りて、瓢客のこゝろを動し盃の数そひて、歌よみ詩つくりて、たはめる枝くくに短尺むすびつけしも、春色の風流なり。音羽瀧おとほのたきは奥之院おくのゐんの下にあり、瀧口三すじ、西のかたへ

落て、四季増減なし。

新古今 音羽山おとはさやかに見する白雪を明ぬと告る鳥の声哉

高倉院

家百首 みるまゝに清水山の瀧津せは心すみますものにぞありける

為盛

爪形観音は、悪七兵衛あくしちひやうゑ景清かげきよ爪をもつて千手観音を石面に彫しなり。景清守本尊も傍の庵室かげきよにあり。